

平成21年 6月 1日現在

研究種目：若手研究（B）  
 研究期間：2007～2008  
 課題番号：19720017  
 研究課題名（和文） 遺骨収集・慰霊巡拝に関する「彼岸工学」的研究  
 研究課題名（英文） A “Higan Kogaku (Another World Engineering)” Study on Recovering Remains and Memorial Tourism  
 研究代表者  
 西村 明 (NISHIMURA AKIRA)  
 鹿児島大学・法文学部・准教授  
 研究者番号：00381145

研究成果の概要：本研究では、戦後から現在まで日本人によって行われているアジア・太平洋戦争の旧戦地における遺骨収集・慰霊巡拝という行為に焦点を当て、インタビューや資料収集を通して、その概要を明らかにした。具体的には、戦死者の亡くなった瞬間と彼が置かれた戦没地からの時間的・空間的隔たりが、霊をはじめとする死者へのイメージや想いを喚起し、遺骨収集・慰霊巡拝という実践を促していることを明らかにした。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2004年度			
2005年度			
2006年度			
2007年度	900,000	0	900,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
総計	2,000,000	330,000	2,330,000

研究分野：宗教人類学

科研費の分科・細目：哲学・宗教学

キーワード：慰霊、巡礼、南方戦、記憶、儀礼、パフォーマンス、モノ、宗教学

## 1. 研究開始当初の背景

従来の宗教研究において、戦死者慰霊の問題は主に「宗教と国家の関係の問題」として、具体的には「政教分離」、「国家神道」の問題として存在してきた。つまり、慰霊の問題は「宗教と国家」という大きな問題を考えるための資料としての副次的な位置づけしか与えられず、そこに固有な問題の探究が立ち遅れてしまったといえ

る。宗教研究の分野で、戦死者の慰霊について実証的調査・研究がおこったのは森岡清美らの宗教社会学の分野からであった。しかし、戦後や旧植民地などへの配慮は十分ではなかったと言える。

戦死者の社会的位置づけについての問題は、ようやく川村邦光による戦死者の表象をめぐる研究によって対象化された。しかしこれは、主にディスコースの位相でのみ問題化されて

いるため、そのイデオロギー的な問題性がどのような実践と結びついているのかということに関する目配りは十分とは言えない。

他方、近年歴史学・民俗学などの隣接分野において戦死者慰霊の研究が注目されている。歴史学では従来の軍事史的研究に加え、民衆史・地域史のミクロな視点から、これまで詳細がわからなかった幕末から戦中にかけての戦死者儀礼の実態に関する歴史資料の掘り起しが進められている。民俗学でも地域の慰霊実践や、戦争にかかわる民俗の実態解明がおこなわれてきている。ただしこれらの研究は、いまだ資料化を中心とした段階であり、例えばモニュメントや遺影そのものの社会的機能を積極的に問うような研究は十分には打ち出されていない。さらにこれらの研究では、近代に入って日本が影響をおよぼした太平洋諸地域における戦中・戦後の戦争観や、遺骨収集や慰霊巡拝に訪れる日本人と戦後新たに生じた接触や交流などはほとんど視野に入れられてはいなかった。

本研究の研究代表者である西村は国立歴史民俗博物館の「戦争体験の記録と語りに関する資料調査」(2002-2003)、ならびに、基幹研究「戦争体験の記録と語りに関する資料論的研究」(2004-2006)に共同研究員として参加するなかで、上のような研究の現状理解にいたった。

## 2. 研究の目的

本研究は、アジア太平洋戦争戦闘地域において日本人による遺骨収集・慰霊巡拝について、宗教人類学的な実証的調査を通して明らかにしようとするものである。そのために本研究では、1)戦死者をめぐる儀礼的パフォーマンス・実践的活動(遺骨収集・慰霊巡拝等)、2)モノ・施設(モニュメント・遺影・遺骨、戦跡・遺構・ミュージ

アム等)、3)行為主体(地域社会と遺族会・戦友会等)相互の社会的ネットワークの3点に注目するものである。

このような問題設定の下で、本研究はミクロネシア地域を中心に「南方戦」の記憶(グアム・旧南洋群島)に焦点を絞り、そこでの儀礼・施設等の調査と、地域住民などへのインタビューから浮かび上がる論点を、「彼岸工学」という新たな着想に基づいて論ずることを目的とした。

研究代表者は、2004年11月に開かれた九州人類学研究会秋セミナーの場で、桑原知子・山口正博らとともにモノを介して死者や神などの「この世ならぬもの」を現勢的にあつかう実践的パフォーマンスへのアプローチを「彼岸工学」と名づけ発表した(西村明「8.9 ナガサキ死者の位置—被爆した『靈魂』のゆくえ—」、2005年)。これは、従来の死者儀礼研究が当該の社会・文化に共有されているコスモロジーや信念体系の抽出を目指し、その結果、「この世」と「あの世」の二元論的理解に基づく静態的モデルに止まっていたのに対し、それぞれのコンテクストにおかれた行為主体が行為の反復をとおして醸成し、かつ自らもそこに巻き込まれる可変的な様式として死者に対する実践を位置づけなおす試みである。

本研究は、これまでの宗教学・文化人類学が蓄積してきた儀礼や人々の行為・実践についての学説や、パフォーマンス研究やフェミニズム研究など関連分野における人々の行為・実践へのまなざし、また情報を伝達しネットワークを媒介する形式としてのモノに焦点をおいたメディアロジー研究などにも目を配りながら、フィールドワークを通して得られるデータを直接的な資料として理論化を試みた。

### 3. 研究の方法

研究方法としては当初次の3点に着眼して進めた。

- 1) 慰霊・遺骨収集等の戦死者をめぐる儀礼的パフォーマンス・実践的活動
- 2) モニュメント・遺影・人形・遺骨、戦跡・遺構・ミュージアム等のモノや施設
- 3) 地域社会と遺族会・戦友会等の行為主体相互の社会的ネットワーク

すなわち、戦死者や戦争体験の記憶をめぐってモノを媒介として実践される社会関係の構築・展開が、本研究の方法論的テーマとなると想定していた。

しかし、実際に調査を進めるなかで、上記の社会関係の構築・展開が遺骨等のモノだけに留まらず、時間的・空間的「隔たり」に基づいていることが明らかとなり、それを本研究における「彼岸工学」的研究の中心に据えた。その上で、戦友を亡くした元兵士、戦死者の遺族、遺骨収集や慰霊巡拝に関与する宗教者の三者について考察を行った。

具体的な調査方法としては、まず、遺骨収集や慰霊巡拝の参加者や関係者へのインタビュー（慰霊実践組織のメンバーとそれに協力した現地住民）、慰霊祭等の画像資料・映像資料の収集を行った。なお、当初は海外調査を中心とする予定であったが、研究協力者の状況変化に伴い、国内調査に比重を移した。国内調査では、日本国内で遺骨収集と慰霊巡拝を報告した出版物の状況把握・収集と、過去の遺骨収集に関わる新聞記事等の収集を行った。

### 4. 研究成果

#### (1) 研究の主な成果

本研究の主な成果としては、①戦友を亡くした元兵士、②戦死者の遺族、③宗教者のそれぞれについて次の点が明らかになったことである。

①元兵士については、生死を分けた瞬間と場所からの時間的・空間的隔たりを埋める作業として慰霊巡拝があったということを指摘した。

②遺族については、遠く隔たった戦地での最期を看取れなかったという思いから戦地に向かい、死者への共感と共苦、戦友らのサポート、区切りと再出発といった状況が見られることを指摘した。

また、①②に関して、遺骨収集・慰霊巡拝の背景にある遺骨の偏在・不在状況が自宅の仏壇や墓、忠魂碑・忠霊塔、さらには靖国・護国神社といった場所への霊の遍在という状況をもたらしていることを指摘した。

③宗教者については、国家的公共性とは異なる宗教的次元から遺骨収集・慰霊巡拝に関わり、死者たちや遺族・元兵士たちと向き合っているということを指摘した。

#### (2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

従来、遺骨収集や慰霊巡拝に焦点を当てた研究はほとんど見られなかったが、本研究によって大きく前進できたと言える。具体的には、日本宗教学会でパネルディスカッション「現代日本の戦死者慰霊—慰霊の現場からみえるもの—」を組み、遺骨収集や慰霊巡拝への関心を共有する研究者たちと議論を行ったことによって、本研究の意義が学会でも広く認められるようになり、近年慰霊巡拝の研究を発表している中山郁氏の論文「生還将兵の戦地体験と慰霊—小田敦巳『一兵士の戦争体験—ビルマ戦線生死の境—』の事例から—」『國學院大學研究開発推進センター研究紀要3』（2009年3月）にも、本研究の成果が言及されている。

他方、国際小島嶼文化会議の場で発表した

際に、島嶼文化の研究を行う海外の文化人類学者や地理学者たちに、本研究の意義が認められ、会議参加者以外からも、後日ペーパーの請求があるなど、反応が高かった。

### (3)今後の展望

本研究を通して、遺骨収集・慰霊巡拝そのものの宗教学的意義が明らかになったばかりではなく、歴史的出来事をどのように受け止め、記録に留め、それを後世の人びとや直接の関係者以外に伝えるかといった、より一般的なテーマへの展望が開かれた。特に、「隔たり」と「連続性」という解釈学的枠組みから、諸宗教における聖典の編纂や伝道といったテーマ群との比較の展望が開かれ、宗教学への本研究の貢献の可能性が開かれると同時に、宗教学・宗教史の蓄積を本研究のテーマに接続した上で、現在、研究と実践の双方からさまざまに議論されている、歴史的出来事の記憶と記録の継承の問題に対して、成果を応用する可能性が開かれたと言える。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

①西村明「遺骨への想い、戦地への想い—」

『国立歴史民俗博物館研究報告』、査読有、第147集、2008年、pp. 77-92

②西村明「遺骨収集・戦地訪問と戦死者遺族—死者と生者の時—空間的隔たりに注目して—」『昭和のくらし研究』、査読無、No. 6、2008年、pp.39-52

[学会発表] (計4件)

①西村明「「隔たり」と「つなぎ」—戦地慰霊の時—空間的構成—」日本宗教学会第67回学術大会、筑波大学、2008年9月15日

②西村明「戦跡へ向かう宗教者たち—遺骨収

集・戦地慰霊への宗教界のかかわりについて」2008年鹿大史学会例会、2008年7月12日

③Akira NISHIMURA “Recovering the Dead: Japanese touring Pacific islands as memorial”, 4th International Conference on Small Island Cultures, in Nauvo, Finland, 2008年6月19日

④西村明「遺骨収集・戦跡慰霊と仏教者たち」第16回日本近代仏教史研究会研究大会、立正大学、2008年5月31日

[図書] (計1件)

京都仏教会監修、洗建・田中滋編『国家と宗教—宗教から見る近現代日本』下(第3部14章西村明「遺骨収集・戦没地慰霊と仏教者たち—昭和二七、八年の『中外日報』から—」p. 31-57執筆担当)、2008年、法蔵館、627頁

### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

西村 明 (NISHIMURA AKIRA)  
鹿児島大学・法文学部・准教授  
研究者番号: 00381145